

の半腹<sup>ク</sup>に、彼塊山出來て瘤の如く、左計三<sup>シ</sup>國無雙の名山<sup>シ</sup>に、此時少<sup>シ</sup>き瑕の出來しこそ恨なれ、  
〔徵古文書乙武藏富士山燒火覺書○寶永四年〕

覺

富士山燒所之儀、昨晦日、同夜中、今朔日之朝迄、最前申上候通別條無御座候、少々宛山上ニ煙登リ候様ニ相見江、震動之儀者最前<sup>ル</sup>減候由、右場所ニ附置候手代方<sup>ル</sup>申越候駿府邊<sup>ル</sup>見分仕候而茂、煙之様子別條無御座、東之方江、煙立登申候、勿論駿府邊震動杯仕候儀無御座候、以上、

十二月朔日

能勢權兵衛

〔信濃地名考下〕淺間嶽

天武紀曰、白鳳十四年三月、信濃國灰降草木枯云々、今按、これ恐くは此山の異をあげたるべし、絶頂の大坑つねに煙立のぼり、硫黃の氣あり、坑廣大略三百間許<sup>ル</sup>坑中に硫黃みつる時、地火突發し大石ほとばしり、砂石を降して麓をやく、其音數百里に聞ゆ、故に此山ひとり兀として四時すさまじ貫之ぬしの詠じ給ふ千磐破あさまのだけ、煙のみ立つゝきて、いく千載震動、雲を焦しつ、山のすがたも變るばかりぞあらん。○中、淺間が嶽は國のみなかになり出て深からず、驛路其肩をめぐれば、路行人も高をおぼへず、<sup>といふは、あさまは、火の梵語也。</sup>されど遠く眺ば、富士に續く何がしのたけなる、明の申叔方海東諸國記に、此山四時白雪をつむといへるは不盡の高根にまがへるとかや、今夏月の雪まれなれど、立春の後百餘ヶ日、霜沢て雪のあしたの如し、又中秋より露寒く、或は霜早く來て、毛作<sup>サス</sup>を刺、故に耕の日せまれり、傳聞むかしは寒氣強く、鍋釜凍<sup>イチ</sup>破たりと、今はかかる事なし、されば秦の代に寒強く、漢に至て暖なりと、苛政は虎よりはげし、今難有順化にあふて、年の寒燠もそれにしたがへるなるべし、

〔千曲之眞砂二〕淺間山